

## [II-D] 解答例

### 問 1

(出題意図) 文章Aを読んで、その文章で述べられている概念(「儀礼的無関心」)について適切に理解し、その概念を用いて写真の光景を説明できるか、文章読解力と文章作成力をはかる。例えば、以下のように展開されていれば望ましい。

#### (解答例)

電車のなかで床に寝転がっている人は、おそらく酔いつぶれて寝ているのだろう。しかし、周りの人たちは誰も声をかけず、皆、寝転がっている人がまるでそこにいないかのように、うたた寝をしたり、本を読んでいる。彼らがみな、声をかけたり起こそうとしたりしないのは、優しくないのでも道徳がないのでもなく、儀礼として無関心を装っているという、ある意味「礼儀正しい」行為をしているからである。たとえば、寝転がっている人が苦しそうに倒れているのであれば誰かが声をかけたり起こして助けを呼んだりすることはあるだろう。だが、苦しそうに倒れているわけではなさそうなので、誰もが皆、必要最低限の配慮以外はず、お互いに深く関与せず、見て見ぬふりの無関心を装っている。

### 問 2

(出題意図) 「車いすにのった男性」をめぐる「4人の女性」、「茶髪の男性」、「小学生」がどんな行為をしており、それらの行為についてどう考えるのか、「儀礼的無関心」という概念を用いて自分の意見が述べられるかをみる。例えば、以下のように展開されていれば望ましい。

#### (解答例その1)

なぜレポートを書いた学生は、車いすにのっている男性をジロジロ見た4人の女性に対して怒りを覚え、車いすの男性の前に立った小学生に対しては怒りの感情を抱かなかったのだろうか。車いすの男性の前に立ってじーっと見た小学生に対して、学生がジロジロ見た女性たちのような怒りの感情を抱かなかったのは、子ども(小学生)はまだ「儀礼的無関心」の行為をこれから身につけていく存在であるということで、学生も寛容な態度でみていたのではないだろうか。それに対して、「儀礼的無関心」の行為が身につけているはずの女性たちが、車いすにのっている男性をジロジロと見るのは、公共空間のなかでの電車で大人としてすべき振る舞いとして恥ずべき行為だと学生は思ったのだろう。その意味で、「儀礼的無関心」は大人がもつべきマナーといえるのかもしれない。

#### (解答例その2)

学生にとって、4人の女性が車いすの男性をじろじろと見ていたのを「不適切な行為」と感じたのは、「障害」をもつ人に対してジロジロ見ることの不適切さもあるのだろうが、電車という公共空間で見知らぬ他人にあからさまに関心を向けることは不適切とされ、「儀礼的無関心」を装うことが必要な空間だと感じているからではないだろうか。他方で、「儀礼的無関心」はあくまで無関心であることを装う一種の演技であり、本当に無関心であることとは異なる。したがって、電車という公共空間では、他人に対してまったく無関

心であることもまた不適切とされる。たとえば、「中に楽器が入っていそうな大きな黒いケースをもった茶髪の男性」が、車いすの男性の乗車を手助けをしたのは、その一例だったといえるだろう。また、「茶髪の男性」が、車いすの男性の知り合い（介助を行っている人）ではなかったようで、電車に乗るとすぐに反対側のドアに寄りかかり、車いすの男性と少し距離をとって、車いすの男性に対して「儀礼的に無関心」の態度をとった。これもまた、見知らぬ他人にあからさまに関心を向けることは不適切とされ、「儀礼的無関心」を装うことが必要であるとされる電車という公共空間でのさりげない行為だといえるだろう。

### 問3

（出題意図） 文章Cは、「儀礼的無関心」の行為が成り立つことができにくい場面（社会から差別される傾向にある「障害者」との出会いの場面）について述べている。筆者が「障害者」に対して「儀礼的無関心」としての行為をしているような場面を「作為的無関心」と言い直したのか、筆者の意図がどれだけくみとれているか読解力をはかる。例えば、以下のように展開されていれば望ましい。

#### （解答例）

障害をもつ人をじーっと見てしまうような「無礼な注目」をする子どもに対して「じろじろ見てはいけません」とたしなめる母親は、通常の「儀礼的無関心」となんら変わりはないのかもしれない。また、「障害者」を注視すること、有徴化することが「差別」であるという認識からくることから、ある意味で差別意識に敏感であり「良心的」な対応なのかもしれない。しかしながら、あえて見ないようにすることで、ことさらまなざしを注ぐ「無礼な注目」とは逆に、かえって「障害者」がまるでそこにはいないかのように不可視化され、しかも差別という現実そのものもまた、そこでは隠蔽され、見えなくなる（不可視化され）るのではないかと筆者は危惧している。そのため、「儀礼的無関心」より強い意味を込めて「作為的無関心」という語を用いたのではないだろうか。

### 問4

（出題意図） 文章Dを読んで、筆者の意見を適切に把握し、なおかつ筆者とは別の自分なりの考えを説得力ある文章で述べることができるか、読解力と自分自身の意見を述べられる力をはかる。例えば、以下のように展開されていれば望ましい。

#### （解答例）

私たちが「儀礼的無関心」という行為が行えるということは、ある意味で、自分の周りの人を他者として出会い理解し、信頼し、相互にやりとりができ、他者とともに日常的な自然さをつくりあげる処方的な知識を備えていることでもある。「障害者フォビア」の感情をいだいてしまうのは、筆者が言うように、その処方知が欠落しているゆえに、「障害者」と関わり接する際に、どうふるまえばいいかわからず、間をもたせることや「儀礼的無関心」の行為といった、ささいなやりとりにおいてすら、私たちは戸惑い、慌て、不安

になるのだろう。その意味で、「障害者」との出会いというのは、さりげなく「儀礼的無関心」という行為をすることも難しくなるような、他者として障害者と出会えない日常を端的に示す現象であるといえるだろう。

だとするならば、どのようにすれば「障害者フォビア」の感情から解放されるのだろうか。筆者は、自分がいままさに「障害者」という相手との間隙に戸惑い、慌て、不安になる思いをいなく瞬間に、えてして予測を越えた相手との出会いの困難さを相手をもつ障害のせいにして、フォビアの感情を間隙に向けて、むりやりねじ込んでいきがちになると論じている。そして筆者は、そんなフォビアの感情を間隙にねじ込む瞬間に、自分と障害者との間に何が起こりつつあるのか、他者として障害者と出会えない自分自身の姿をまずは見つめることが必要だと述べている。

しかしながら、自分自身の姿をまずは見つめること、はたしてそれだけでフォビアの感情から解放されるのだろうか。たしかに、筆者が述べているように、私たちには、障害者を他者として理解し、信頼し、相互にやりとりができる処方的な知識が欠落している。私たちは、日常のさまざまな場面で他者として障害者と出会える実践的な処方箋的知をいわば体系的にもちあわせていないのであり、障害者とともに“適切な”関係をつくりあげるうえで、まだまだ生きた想像力を発揮できていない。

だとするならば、「儀礼的無関心」はもちろん、「作為的無関心」を装って「障害者」や彼らを差別している現実を不可視化するのではなく、まずはさまざまな「障害」をもつ人たちと数多く出会い、実際にやりとりをすることで実践的な処方箋的知を創造していくしかないのではないだろうか。それは例えば、外国の異文化における実践的な処方箋的知をもつには、その外国におもむいてそこで生活する人たちとふれあうことが先決であるように。また、それは、はじめからうまくいかず、そこには「障害者」という相手に対して戸惑い、慌て、不安になる思いをいなく自分がいるかもしれない。その意味では筆者の言うように、その自分自身の姿から目を背けようとしないことが必要になる。自分自身の姿から目を背けようとしないこと、そしてさまざまな「障害」をもつ人たちとつきあうことで、彼らとも日常的な自然さをつくりあげる処方知をもてるようになること、そこからはじめるしかないのではないか。